

雑学 烏獸植物戯詩

全24回

八木 幹夫

第20回【西瓜】

真夏のスープーでは西瓜が目をひく。畠では風にそよぐ西瓜の葉が大きな実を隠している。縞模様が一種の擬態となつてゐるのか。軽く叩くと熟れたものは音がちがう。井戸水でよく冷やした果肉は歯にも舌にも心地よい。「瓜田に履くつを納れず」とは中国の故事だが、少年時代、西瓜泥棒は経験が無いわけではない。

蟬が鳴き止む程の暑さ。洋服職人たちの「お三時」に母は西瓜を出した。縁側にまな板を置き、井戸から運んだものに鉈切り庖丁を入れる。真つ赤な身がごろんと横になる。四分の一をさらに三角形に切る。すると端の方が情けない形になる。子供五人の食い意地は大きな果肉に集中する。塩をまぶすと更にうまい。

数年前から畠で西瓜栽培に挑戦している。少年時の食い意地が再発したのだ。種からポットに蒔く。25℃の温度が続く温室代わりのガラスケースで双葉から本葉5枚ほどが出るまで育て、寒の戻りに注意し元肥たっぷりの畠に移植。敷藁をすると喜んで蔓をのばす。八月の西瓜畠は古人でなくとも、履を踏み入れたくなる。あの少年の日の西瓜をまるごと食いたい。